

## 【研究ノート】

## 于謙の「石灰吟」について

甲 斐 勝 二\*

## 初めに

昨年から全学向けの教養科目である「中国文学」の講義担当を引き受けている。大学の教養科目の位置づけや考え方は筆者が学んだ 40 年以上前の教養部時代からずいぶん変わってきており、本学のように所謂文系学部や医学部・薬学部・スポーツ科学部を含む理系学部に通う学生全般に向けて講じる「中国文学」とはいかなるものがふさわしいのか、あれこれ悩んでいる。ずいぶん前にも「中国文学」を引き受けたときがあって、そのときに中国の義務教育で小学生が学ぶ『語文』（我々の所謂「国語」）教科書掲載の古典詩を使っただけの授業を構想したことがあった。小学生の学習課程におかれるなら現代中国における基礎教養の一つとみなされているのだろうし、本学の学生達がそれを知ることは地域文化の共有として今後の交流にも役立つだろうと考えたからである。実際には行った記憶はないのだが、同様の方法を考えたり行われてた方もいるに違いない。

拙論ではその時に見つけた明の于謙の「石灰吟」について考えてみたい\*1。この「石灰吟」は所謂「消石灰」ができあがる過程を唱った詩で、なかなか科

---

\* 福岡大学人文学部教授

\*1 人民教育出版社『語文』六年級下冊（2006・10）。原文は簡体字なのだが、他のテキストとの比較が容易になるよう繁体字で記す。以下同じ。

学的な所がある。筆者は現在人文学部に所属しながらも故あって工学研究科の資源循環・環境工学専攻にも属しその研究の一翼を担っており、常々文学研究と環境工学研究の接点を模索していたところ、石灰がゴミの処理に関係があり、現代では排煙脱硫装置で使われ、また酸性雨に対する中和剤としても使われていることを知った。その縁から中国の明代に詠われた于謙の「石灰吟」についてここに取り上げ、検討を試みた次第である。もとよりまだ現代のような環境問題は意識されていない当時ではあるので、結果としては環境工学とはあまり縁のないものとなったが、提示した資料の中になにか環境工学に役立つことがあれば幸いである。

## (一) 「石灰吟」のテキストを巡って

先ず初めにテキストを確認しておきたい。「石灰吟」の内容は至って単純で主張も明快なのだけれども、実は字句の異同がしばしば見られる。作者とされる于謙は明の人で、北方のオイラト族の侵略に国を守りながらも、晩年には皇帝交代にからんで誣告による罪をうけ最後は刑死しまった人物である。その忠臣としての誉れは高く、明史にもその伝が掲載されている\*1。彼が吟じた「石灰吟」は石灰の生成過程を語りながら自らの志を説くものとされる。中国古典詩文の伝統的分類に従えば、事物に喩えて志や道理を唱う「詠物詩」の部類に入るものである。私のみた人民教育出版社『語文』教科書に収録される詩文は以下の通り。筆者の訳を（ ）に付す。

千鎚萬鑿出深山 （深い山から何回も鎚や鑿を振るわれて切り出され）  
烈火焚燒若等閑 （激しい炎で焼かれてもなんのその）

---

\*1 于謙の評価や伝記については新田元規「明末清初における于謙の評価問題」（徳島大学総合科学部 人間社会文化研究 第25巻 2017）参照。

粉骨碎身全不怕（骨が粉々になり身が砕けようとも全く恐れることがなく）  
要留清白在人間（清らに白い姿を人間の世界に残そうとする）

拙訳を読んでいただければおわかりのように、この詩は、山奥から切り出されてきた石灰岩が、激しい火に焼かれ「生石灰」となり更に加工され（水が加えられて大量の熱を発生しながら）粉々に砕かれ、やがて世間で利用される真っ白な粉の「消石灰」が生成される様子を歌うものである\*1。そこに自らの志が重ねられていることは十分理解できよう。またその石灰生成の過程はかなり忠実に描かれているように見える。

この詩は、2000年に国家教育部から示された「九年義務教育全日制小学語文教学大綱」に付録としてつけられた「古詩詞背誦推薦篇目」(80篇)に既に含まれており、その後示された「全日制義務教育語文課程標準」(2011年版)に付録される推薦作品75篇の中にも採用されているので、先掲の『語文』もその推薦に準拠して採用したものと思われる\*2。だとすれば、人民教育出版社版以外から出版されている他の『語文』教科書にも同様に掲載されていることが予想され、現在では中国の小学生必読の古典詩として既に認められているものといって良いだろう。

この詩の理解については、例えば、『小学1-6年級必読古詩詞80首』(上海教育出版社2000)などは、以下のようなテキストを挙げ\*3、「導読(読書指導)」を与えている。(なお、テキストに異同がしばしば見られる例を示すため、今後それぞれの書籍に挙げる「石灰吟」のテキストを先ず挙げ、『語文』版と異

\*1 以下論中で特に断りがなきには「石灰」といえば消石灰を指す。

\*2 「石灰吟」は人民教育出版社1980年版の『語文』には採録されていない。2000年くらいから急に推薦古文の小学生用の参考書が出回るようになるので、推薦詩も2000年の教学大綱あたりから教科書への導入が始まったようである。

\*3 以後の引用文は中国語の原文は上げず解釈した後の訳文のみを示すことにする。出典は示しているので、必要があればご確認を願いたい。以下同様。

同があるところにアンダーラインを引いておくことにする。)

千鎚萬鑿出深山 烈火焚燒若等閑 粉身碎骨運不怕 要留清白在人間

【導読】これは詠物詩である。詩人が事物に託してその志を述べるもので、石灰を借りて国へ忠誠をつくす願いを述べ、またたとえ粉骨碎身の目に遭ってもその潔白で高尚な情操を世間に残そうと願うものでもある。詩の中では至る所で石灰をもって自らを喩えていて、石灰の吟詠がそのまま崇高な人格を賞賛するものになっている。

また小学生の必読古詩を集める『小学語文古詩対照注釈』（広西民族出版社2002）では、以下のようなテキストを示して後、「賞析（鑑賞と分析）」を述べる。

千鎚萬鑿出深山 烈火焚燒若等閑 粉骨碎身全不怕 要留清白在人間

【賞析】これは物を借りて人を喩える詩である。詩の中で詩人は石灰ができあがる過程を人格化するように描きだす。狙いは石灰のように強く正しくおもねず、脅しにも屈せず、死ぬことさえいとわずに、最後まで高い思想情操をもった人物を褒め称えようとするところにある。詩はまさにその人物を表すもので、この詩は作者が石灰を以て自らを喩え、その志を守って屈せず、国のために精一杯尽くそうとする決心を伝えている。

この二種の理解によれば、この詩は邪な心のない精神の潔白性を以て、労をいとわず粉骨碎身し、志を遂げることの大切さが訴えられているように見える。それだけでなく、その志が「愛国」につながるものであるべきことに及んでいるのは、近年成長著しい中国における愛国教育が強調される場所であろう。二書のテキストはそれぞれ『語文』と字句に異同があるが、伝達内容に違いはない。ただし、それぞれ基づいた書籍は記されていない。

この詩は小学生のみならず、一般向けの古典詩解説書にも採録されているの

で、小学生向けの詩であるに留まらず、社会的にも評価が高いものだとあって良い。市民向けに編輯されている上海古籍出版社『古詩海』（1992）では明の于謙の部分に以下のようなテキストを挙げ、次のような解説を加えている。

千鎗萬擊出深山 烈火焚燒若等閑 粉骨碎身全不怕 要留清白在人間

これは事物を詠じながら自らの志を述べる（詠物言志）作品で、永樂12年（1414）に書かれたもの、作者が16歳の時である。この詩は擬人化の手法を用い、石灰に借りて己の高尚な情操と非凡な抱負を伝えようとするものである。しかし、作者のその後を経験する人生は、まさにこの詩の内容のまことに良い説明であり、まさに「人間に清白を留めんと要す」を実践したものであった。……この詩は一句一句、一語一語が石灰と自己をかけた二重の意味を持つ。四句中すべてが石灰について語られていながら、またすべて自己について書かれているのである。事物にその志を寓し、事物を通して人を語り、事物と自分が一体となって、縫い目の見えぬ天衣無縫の世界に至っている。

ここでは詠物としての詩作りのうまさも高く評価されているが、テキストはやはり『語文』掲載のものとは一文字違っている。于謙の人物解説の部分に『于肅愍公集』が挙げられていたので、これはそのテキストによるものであろうと推測して当たって見たものの、「石灰吟」は『于肅愍公集』自体にはなく清代光緒25年の識語がある『拾遺』の中に掲載されていた\*1。『拾遺』のテキストでは、三句目「全不怕」を「全不惜」と作っており、どうやら『古詩海』はそのまま使ったものではないようだ。また、制作時16歳だったと述べる拠り所も『拾遺』にはなく不明である。『古詩海』の「出版説明」には「かなり信頼

\*1 『于謙集』 魏徳良点校（浙江古籍出版社 2013／9）掲載の「拾遺」による。

できる版本に依った」と書いているので、拠り所はあるはずだ。

『拾遺』によると「石灰吟」は清の丁継先の編輯による于謙の詩文集から採録したものである。その『拾遺』を刊行した丁立の記すところによれば、于謙の詩文集は、明代の嘉靖丁亥河南大梁書院本（1527）、天啓辛酉孫昌裔刊本（1621）、及び清代の康熙丁酉于継先重輯本（1717）の三種あったという。丁継先の詩文集からの採用とすると、明代に刊行された二種の詩文集にそれはなく、清代の詩文集になって掲載されたものとなる。丁立はこの丁継先本を「善本ではない」と断言しているので、その選別はあまり信用できない可能性がある。とはいえ、これに先立つ清代刊行の書籍には、この詩が于謙の詩であることを明言したものがあるので、于謙のものとしての認識はそのころにはできていたのだらう。『御撰宋金元明四朝詩』（康熙四十八年 1709）には于謙の詩として「千槌萬鑿出深山 烈火叢中煉幾番 粉骨碎身都不顧 只留清白在人間」が採録されている。姚之駟の『元明事類鈔』\*1には「要留精白」の項に以下のような話が残っている。

『于肅愍公行状』によれば、景泰の初め、公が京城の修築を監督した折、石灰を見て絶句一首が口をついて出た。

千槌萬鑿出深山	千槌 萬鑿 深山に出ず
烈火坑中煉爾顏	烈火坑中 爾が顔を錬す
粉骨碎身皆不顧	粉骨碎身 皆な顧みず
要留清白在人間	清白を人間に留むるを要すのみ

これは、その将来を予言する詩（詩讖）だったのである。

---

\*1 『元明事類鈔』：刊行年はよく分からないが、姚之駟は康熙六十年（1721）の進士だというから（『後漢書補逸二十一卷』四庫全書総目提要による）、おそらく康熙年間後半以降の編集であろう。

姚之駟の記事が基づく『于肅愨公行状』がどんなものかよくわからない。しかし、姚之駟はかなり慎重に記事を選んでいられるらしいので\*1、それを信じれば、この一首は景泰年間（1450-1456）初の作となる。于謙の生卒年が1398-1457だから、そのころは52歳をすぎたくらいであろう。当時は土木の変でオイラト族に英宗が捕虜となり、代わって景泰帝が立ったばかりのころで明の防衛のために北京の城壁の修理中の作となる。この説は、先に挙げた『古詩海』の解説が言う「16歳」の時の作という説と齟齬を起こすことになるので、『古詩海』解説のよりどころが知りたいところだ。

さて、こうしてみると、于謙の「石灰吟」は清代康熙年間には于謙の作と記された書、例えば『于肅愨公行状』のようなものが流布しており、そこから于謙のものとして認められ選集やその文集に採録されるようになったようである。

だとすると、清代によく発見されたという推測も可能に思われてくるが、この「石灰吟」は明代において于謙の作としてすでに伝わっていた。というのは、明の『西樵野記』が「石灰吟」に類似する詩を引き、それが当時辺境を守った李都憲が唱ったものだとして述べる記事に対して、王世貞（1526-90）が于謙の詩の間違いだとして述べているからである。その李都憲が唱ったとされる詩は以下の通り。まことに「石灰吟」に酷似する。

千槌萬鑿出名山	千槌 萬鑿 名山に出ず
烈焰光中走一番	烈焰光中 走ること一番
粉骨碎身都不怕	粉骨碎身 都に怕れず
只留青白在人間	只だ 青白を人間に留むのみ

---

\*1 四庫全書総目提要による。

『西樵野記』ではこの詩をその後辺境で失敗し殺害されることになった李都憲の将来を予言したもの（詩讖）と見なしている。しかし、王世貞はこの詩が于謙の「石灰吟」に極めて似ていること、辺境を守ったという李都憲の故事が確認できないことにより、于謙の詩が誤って李都憲のものとして伝えられたものだと考証する\*1。だとすれば、この記事を載せる王世貞の『弇山堂別集』が刊行された頃（初刻萬曆18年1590）には「石灰吟」が于謙の作だとして知られていたこと、またその詩は他の人物に仮託されるほど広く伝えられていたことがわかる。

これに対し、『于謙集』の点校者魏徳良氏が『拾遺』の「石灰吟」の注に引く閻崇年氏の考察が面白い。閻氏によればこの「石灰吟」が最初に確認できるのは、萬曆年間（1573-1615）に刊行された歴史章回小説『于少保萃忠全伝』であるらしい。閻氏はさらにこれが「作者（孫高亮）が于謙の口を借りて于謙の精神や徳業を吟詠して称えた小説家の言葉であって、于謙の作ではない」と考えているようである\*2。

しかしながら、王世貞が指摘した『西樵野記』に于謙の石灰吟に酷似した詩があるということは、『西樵野記』が刊行された時に、このような詩が既に知られていたことになる。『西樵野記』はその撰者の自跋が嘉靖庚子（1540）に書かれているから\*3、萬曆に出た『于少保萃忠全伝』より以前からこのような詩が伝わっていたことになる\*4。だとすれば、もし、閻氏が推測するように于

---

\*1 弇山堂別集卷23（中華書局 1985）。

\*2 「于謙『石灰吟』考疑」（于謙研究会編『于謙研究』第二輯）と出典が記されているが未見。なお『于少保萃忠全伝』では于謙が科挙を受ける前年永樂17年（1419）話として出てくる。当時于謙は22歳であるが、もとより小説なので当てになるものではない。ちなみにそこで吟じられる詩は「千鎚萬擊出深山、烈火焚燒若等閑。粉骨碎身全不惜、要留清白在人間」となっている（[夢園书城 历史演義](http://www.my285.com/gdwx/xs/yqi/ysb/08.htm) < <http://www.my285.com/gdwx/xs/yqi/ysb/08.htm> > 掲載）。

\*3 『蔵園群書経願録』卷九子部に記す『西樵野記』の撰者侯甸の自跋による。

\*4 『封神演義』第七回に、「古に云う、粉骨碎身俱不惧、只留清白在人間」と「石灰吟」と思われる二句を引くが、そこでは作者は出てこない。

謙の作とされる現在の「石灰吟」が萬曆年間の孫高亮の作だとしても、その詩はそれなりに基づくところがあったと言わねばならない。

筆者が手に入れた資料で推し量れるのはここまでである。これを要するに、どうやら「石灰吟」は于謙の作であるという決定的な証拠はないようだ。場合によっては『西樵野記』に記されるように本来は李都憲の作として伝わっていたものが、明代の小説の中で于謙に結びつけられ、いつの間にか于謙の作に変わったのかもしれない。もし于謙の真作だとしても于謙はそれを正式な場所で作ったのではなく、何かの機会に唱ったものが、異同を生みつつ広く世間に唱い継がれていたのだろう。それが于謙の文集に掲載されて于謙の作に帰属されたのは清代になってからのものらしいこと、それでも世間に伝わっていた時間が長かったため、いまでもかなり字句に異同が許容されながら流布しているというのが現状のようだ\*1。『語文』の基づくテキストが何なのかは、結局よくわからなかったのが心残りだが、これについてはもう少し資料調査を進めたい\*2。

ついでに、一字一句に細心の注意を払うはずの詩文に、現在なぜこれほど字句の異同が許容されたままで通っているのか、疑問に思われる方もいるだろうから、これについて私見を述べておきたい。それは字句の異同にかかわらず石灰の生成の過程がそれで間違いなく伝わるからであり、それを受けた主張「留清白在人間」の部分にさえ異同がなければ目くじらを立てるほどのことではないからだ、と考えている。

---

\*1 于謙の詩文は一度散逸したらしく異同が多いという指摘が『于忠肅集』の四庫全書書前提要に記されている。

\*2 このほか、インターネット上あちこちに説かれる「石灰吟」の解釈には、12歳の作だとか、17歳の時の作だとかあるが、『古詩海』同様典拠が記されていないので、あてにはできない。『語文』掲載のテキストは、先に挙げた『于少保萃忠全伝』掲載のものや『于公集拾遺』のものが最も近いようだが、それぞれ字句に「全不怕」を「全不惜」「渾不怕」に作り完全に同じというわけではない。或いは教科書採録時に小学生にわかりやすいようにと字句を置き換えたのだろうか。

## (二) 石灰のイメージについて

私は当初『語文』に石灰に関する詩を見たときいささか意外な気がした。それまで詠物詩というものは身近な物から思いがけない日常の道理を引き出すところに作者の事物を観る目や作詩の技量が示されるものだと思っていたからである。掲載は推薦図書に入っていたからだ、といえはそれまでだが、日本の都市の中で育った私にとって、石灰など小学校や中学校のグラウンドのライン引きに使うくらいしか思い浮かばず、従って当初は「小学校」なら確かに縁もあるだろうと思うくらいだった。その後、郊外に引っ越し農地を見る機会が増え、石灰が畠の肥料の一部として使われていることを知った。また、調査で中国の雲南に出かけたとき、宿泊した農村にある平地に穴がほってあるだけの共同トイレに石灰が撒かれているのを見た。日本でも、鳥インフルエンザの拡散を防ぐためや\*1、水害後の消毒などでは石灰を使うことがあるから\*2、その共同トイレでも消毒や殺虫のために散布されていたのではないか。中国の都市の街路樹の幹が白く塗られた風景をしばしば見かけるが、それは石灰を使った虫除けだという。また、かつて各種の政治運動があるたび、工場や家の壁に白く太く記されたさまざまなスローガンもおそらく石灰を使って書かれていたのだと思われる。だとすれば、石灰は中国では農村はもとより都市でも各種の用途がある身近な存在だったわけである\*3。このほか石灰はいまでも白壁を作る漆喰などに利用されているから、なるほど人々の生活に大いに貢献していることが分かる。当初の感覚は私の経験不足によるものだと言わざるを得ない。

---

\*1 石倉洋司「消石灰の鳥インフルエンザに対する消毒効果の検討」  
[http://www.pref.shimane.lg.jp/industry/norin/seisan/kachikueisei/kantei/siken\\_kenkyuu.data/19sekkai-aiv.pdf](http://www.pref.shimane.lg.jp/industry/norin/seisan/kachikueisei/kantei/siken_kenkyuu.data/19sekkai-aiv.pdf) 参照。

\*2 水害後の処理に関する自治体の提言を参照。例えば倉敷市では、消石灰を散布することを勧めている。

\*3 ただし、中国も現在では上海・北京などの都市部では既に日本同様、小学生の生活にはあまり縁のないものになっている可能性はある。

それほど身近なものだとすると、長い歴史のある中国のことであるから、これまでに石灰を唱った詩があるだろうと調べてみたが、調べた限り、于謙に先立つ宋代の釋紹曇の「石灰」の詩があるくらいだった。内容は以下の通り。寺院の建築で白壁を作る漆喰や凝固材やなどとして使われることに注目しての作詩のようである\*1。

鑪鞴親從鍛鍊來，（コンロに鞴ふいごを使って自らを焼き鍛えて）  
 十分確硬亦心灰。（非常に堅牢だが内心は灰のよう）  
 蓋空王殿承渠力，（仏の宮殿を建てるにはその力が必要で）  
 合水和泥做一回。（水に混ぜ泥をこねて一仕事）

最初の二句は鞴をつかって火を激しく燃え上がらせて焼き、まだ硬い生石灰の石塊に水をかけて粉末の消石灰に変えていく作業手順を言うものと理解したい。「心灰」とは、莊子に所謂「灰心」のことで静謐の極みの心のことを言う。焼き上げた生石灰に水をかけて粉碎可能な消石灰が生まれてくることをいうのだと考えている。「空王」である仏の道に参するものの詩であれば、この灰には邪心を焼き尽くした悟道の心のたとえとなる。これもまた、烈火に鍛えられた後の消石灰としての純粹な姿と、それが漆喰化されて建物作りに貢献する姿をたたえたものとなっているが、詩として比べれば于謙の方が石灰の白さの表現にかなり打ち込んだものとなっていること、先に挙げた『古詩海』の詩句解説の指摘の通りだろう。

石灰に関する詩が他にないかと探してみたが、管見の及ぶところこの他には地名として出てくるくらいで、どうやら詠物詩としてはそう好んで取り上げられる物ではなかったようである。

---

\*1 全宋詩三四三〇巻掲載、資料は九州大学の東英寿教授からの提供。

では、于謙が石灰吟を唱ったとき、石灰にはどんなイメージが結びついていたのだろうか。当時の使用法を通じて見てみたい。石灰は、世界の各地でずいぶん昔からあれこれ使用されているので、その起源も推測するしかないようだ\*1。中国でも昔からさまざまな場所で用いられていた記録がある。

石灰吟を詠じた于謙の頃、当時の石灰についての認識がどのようなものであったか、それを知るには、時代はやや下がるが明代萬歴年間に初刻がみられる李時珍の『本草綱目』の記述が参考になる。『本草綱目』が中国薬剤学の古典としてよく知られていることは言うまでもないのだが、そこではその物品の薬効についてその性質や効能を説明するだけでなく、それにまつわる雑知識や記事も記されている。これを手がかりに考えてみたい。

『本草綱目』では石灰は「石部」巻九にあげられ、「今人は窯を作りこれを焼く。柴あるいは炭を重ね、その上に石灰石を並べ、下から火をつける。それぞれの層が焼けて散り散りとなる。薬に入れるには風化の方を使い、石が雑じていないものがよい」と、当時の制作法が記されている。風化とは、石灰石を焼いてできた生石灰を、しばらく放置し空気中の水分を吸って自然に消石灰として碎けるのを待ったもののこと。風化のほかに水化というものもあり、こちらは生石灰に水をかけて化学反応を推進させて粉々にするものだが、薬効は風化のほうがあるという。

『本草綱目』では薬としての石灰の各種処方にあわせ、六朝の陶弘景の語、「古今墓を作るときに、防水や虫除けに用いており、古塚の中にたまる水で皮膚病を洗うと、すぐさま治る」を引いている\*2。この古塚にたまる水の薬効を伝える話は陶弘景に先立つ晋の葛洪『抱朴子』内篇巻九に以下のようにあり、それ

---

\*1 角田清実「古代から中世前期における石灰と漆喰の利用」（専修人文論叢 第88巻 2011）参照。

\*2 石灰を墳墓に使うのは日本や韓国でも同様である。角田清実「古代から中世前期における石灰と漆喰の利用」（専修人文論叢 第88巻 2011）参照。

を例証するものとなっている。

洛西には古い大きな墓が有り、穴があいて崩れそこに水がたくさんたまっている。墓の中には石灰が多く、石灰水は皮膚のできものを主に治すものである。ある夏、できもののある旅人が、暑さのあまり、この墓の水が澄んでいるのを見て、水浴したところそのできものがたまたま治ってしまった。これより、各種の病気のものがこれを聞きつけてぞくぞくやってきて水浴し、やがてこの水を飲んで腹中の病を治す者も現れた。墓の近くに住むものが、社を建ててこの水を売った。買いに来る者の社へのお供え物には、酒や肉が絶えなかった。ところが買いに来る者が次第に増えると、この水もなくなってしまった。そこで水売りは毎夜他の場所の水を密かに持ってきて追加していた。遠くて買いに来られないものは、使いの者に器を持たせ手紙を送って買ったのである。これによって水売りは大金持ちになった。効果がないという人がでて、お上から禁止され、穴を埋めてしまい、終わりとなった。

陶弘景の語がこの話に基づくものではなく、実際の状況を伝えるものであれば、穴の開いた古塚にたまる水の効用については、葛洪の他にも気づく人がいたことになる。古塚に自然と穴が開くのはそうあることとは思われないので、その穴は盗掘によるものに違いない。だとするとそのころ古墓の盗掘があちこちで行われてそのような水のたまる穴も多かったことも推測されよう。

『本草綱目』では「古墓の中の石灰を地竜骨という」といい、中でも「棺の下にあるものがもっとも優れる」と説くから、当時でも墓や塚などに石灰があることはよく知られていたらしい。竜骨というので一定の大きさの塊があったことがうかがわれる。だとすると棺の下にはかなり石灰を厚く塗ったか敷いて、それが後に固まって骨のように見えたことが推測される。抱朴子の話で

は、古墓の穴にたまった水がなくなったので足し水をしてもしばらくは効力を発揮し続けたらしい。それはかなりの石灰がそこに使われていたからではないか。

実際、墓に石灰を使う例として、明に先立つ南宋の『朱子語類』に、朱子が長子の仮埋葬の折、石灰で穴の周囲を塗り固めた話が記されている（巻89）。明代の『居業録』では、棺に虫を近づけないようにする工夫として石灰を使うことを説いて、「葬るときは棺を被う外郭はなくても良い。蟻（地中の虫）がいない土地ならばそれで大丈夫であるが、江南には蟻が多いので、外郭は必要だ。『家礼』に依れば灰で隔絶するのが最もよい。貧乏でそれが準備できない者は、石灰や炭末を三四石分小石や石くずを混ぜて棺の周りを被う。さもないと蟻に食べられてしまうだろう」（巻5）と述べている。「灰で隔絶する」の「灰」は『朱子家礼』では「灰漆」となっている。おそらく後にでてくる石灰を桐油に溶いたもの（水竜骨）で漆喰の一種と思われる。だとすると墓や死体の埋葬時に棺を石灰を使って被うことは、明代でも続いていたことになる。

『本草綱目』には水死人の下に敷いて命をよみがえらせる効果についても記しているが、この効果にはわかには信じがたい。おそらく仮死状態の水没者がたまたま埋葬時に下に敷かれた石灰に触れ、それを契機に目を覚まし息を吹き返したような伝聞でもあって、それに依った記事であろう\*1。というのは、棺の周りに石灰を塗るばかりでなく、死体を直接石灰の上に埋葬することもあったことが推測されるからだ。

これについては、後唐時代の話に、反乱軍の家族を石灰窯に追い込んで大量に斬り殺したという話（『資治通鑑』巻二七五）や、以下のような記事が、死体の直接埋葬と石灰を結びつけるものである。

---

\*1 明代の末の『物理小識』では救溺人法（巻三）の中に溺れた人間の助け方として、石灰を用いて肛門から水をとる方法が挙げられていたが、或いはこのような話が大きくなったのかもしれない。

張季崇はそもそも書生だったが、幽州の武将となり、契丹に捕まったものの、穏やかでおとなしかったので契丹の將軍に信じられていた。そこで部下と語らって本土に戻ろうとした。部下が泣いて言うには、「帰国のことは忘れたことはありません。しかし味方は少なく敵は多すぎます。どうしますか。」張季崇は言う「私が先ず將軍をだまして殺してしまえば、その軍隊は潰れてしまうはずだ。この場所は敵の本陣から遠く離れているので、知らせを聞いて軍を出す頃には、我々はもう遙か遠くさ。」みなは言った「それはいい。」そこで、先ず穴を掘り、石灰で満たした。翌日敵の將軍を招いて酒を飲ませ、酔ったところで、従者共々殺してしまい、穴の中に投げ入れた。その軍隊は城北に駐屯していたが、すぐさま攻撃すると、契丹の連中はみな崩れ去った。（『資治通鑑』巻276）

逃亡を企み、そのために將軍を殺害してその死体を棄てる穴に、あらかじめわざわざ石灰を撒いておく理由もなさそうだが、それが世話になった契丹の將軍へのせめてもの葬礼の態度だとすれば納得もいく。或いは、石灰になにかおまじないのような効果があったのかもしれないが、いずれにせよ、埋葬される死人と石灰に縁がなければ不要な作業である。

『本草綱目』に引く陶弘景はもう一つの防虫作用を指摘している。これについては、農業関係の知識を語る農書、例えば宋代の『農書』では種まきのおりの石灰の防虫作用について記されているので、農民には知られた事だったろう\*1。どうやら蚯蚓（ミミズ）退治にも使われたらしい。土地の蚯蚓が悪さをするというので石灰を巻いて退治したものの、殺生の報いで死んでしまった唐代の僧の話が以下のように伝わる。

---

\*1 宋陳旉『農書』上卷六種之技篇『農書』。また元の『王禎東魯王氏農書』には、土地を暖める肥料として石灰が挙げられている（糞壤篇）。

唐の天祐年間、浙西で慈和寺を建て直した。土地割りをするたびに、ミミズに穴をあけられるので、請負者たちは困っていた。ある僧侶が石灰で覆わせると、それがなくなった。しかし、無数のミミズを殺すことになったのである。しばらくすると、その僧侶は体中がかゆくなった。しばらくして、指の爪でかくとかさぶたができたが、かさぶたの中から死んだミミズが一匹出てきた。多分百千匹のミミズによって肉が食い尽くされ骨まで至ったのだらう、死んでしまった。(宋『稽神録』蚯瘡)

このミミズの祟りについては、仏教の殺生を忌む話や因果応報の話の尾ひれがついたものであろうが、土壌の安定剤としての効果や殺虫剤としても石灰が用いられていたことを伝える話である。

『本草綱目』では棺の下に出る地竜骨に並べて、舟の防水に使われた水竜骨と呼ばれるものも挙げている。それは現在でも凝固剤として使われる油石灰<sup>\*1</sup>が、木造船の製造において木々の間を塞ぐために用いられたものが残った物で、それ自体は主に防水を目的に使われているようだが、舟の材料が木であることを考えれば防虫作用も期待されたのではないかと思う。先の『朱子家礼』に言う「灰漆」がこれに類似のもので棺の塗装に用いられて、防湿防虫に使われたものと考えている。なお、この水竜骨も廃船のものが薬剤としては優良らしい。古いほど効果的だということなのだろう。

于謙当時の産業を考えれば、まだ農業が中心だったはずであるし、また墳墓や舟の製造でも使うとしたらあちこちで石灰は使われまたそれに相応しい供給がなされたらう。したがって石灰も大量に準備されることができたはずである。『後漢書』には楊琯が数十台の馬車に石灰を積んでまき散らして、賊の目をくらますという話が記されている<sup>\*2</sup>。このような利用は、おそらく思いがけない

---

<sup>\*1</sup> 正確な名称は桐油石灰膏。乾燥性の桐油で石灰を溶いたもの防水剤に用いる。

<sup>\*2</sup> 『後漢書』張法馮度楊列伝

戦略としての使用だから記録が残ったわけで、通常の利用法ではなかったと思われるが、当時数十台の馬車に積んで目くらましに使用したところを見ると、既に後漢の時代にはもう石灰を大量に準備できた事が推測される。時代も下って明代ともなれば石灰の流通も身近にみられたものであったろう。明に先立つ五代の頃には日常的で下積みの人々の仕事になっていたらしいことは以下のような話から想像がつく。

天成年間（926－930）の初め、（明宗の養子に当たる）李從珂は河中の節度使となった。……以前、李從珂は枢密使安重誨を好んでいたが、常山で宴会の折意見が合わず、拳で安重誨の頭に殴りつけた。櫛にはあたって、安重誨は逃げて殴られずに済んだ。後、李從珂は安重誨にわびたのだけれども、安重誨はずっとこれを恨みに思っていた。李從珂が河中を治めるにいたると、彼は城市を留守にする事が多かったので、安重誨は皇帝の詔を騙って、下級の軍官楊彦温に城を出るのをみたら城門を閉ざして入れてはならぬ、と伝えた。その年の四月五日、李從珂が黄龍莊に馬を見に城を出た折、彦温は城門を閉じて李從珂が入るのを拒んでしまった。李從珂は問題が生じたと聞いてすぐさま戻り、使者にその理由を尋ねさせた。彦温は、「どうか朝廷へお出ましく下さい、この城には入れません」と言う。李從珂は虞郷に留まり、お上に報告すると、明宗は宮殿に帰れと告げ、薬彦稠に軍を率いて彦温を討伐させたが、生け捕りにして、理由を聞いたがそうとした。十一月城を解放したところ、彦温は既に死んでいた。明宗は彦稠が生け捕りにできなかったことをひどく怒った。数日後、安重誨は李從珂が城をとられたことを理由に、宰相から皇帝に処罰を下すようにほめかさせたが、明宗はよい顔をしない。安重誨が再度自分で申しあげると、明宗は「私がまだ下っ端のころ、家の者どもは衣食が足りず、あいつが石灰を背負い、馬糞を集めてくれたおかげでなんとかなったのである、今や

天子の位にある私が、こいつ一人くらい庇護できないものか」と言ったのである。（『旧五代史』末帝紀上による）

李従珂は後唐第四代の最後の天子となる人物で、それをかばった明宗は後唐の第二代の天子で、その養父に当たる。李従珂は以前酒の席で権臣安重誨に乱暴を働き彼の恨みをかっていたため、その謀略に陥れられたのであるが、養父である明宗はどうやら安重誨の企みと見抜いていても、鍵を握る人物である楊彦温は殺されており尻尾がつかめない。そこで悔しさのあまりに下っ端の頃の話を持ち出したようである。養子である李従珂が「石灰を背負い、馬糞を集めて」くれたおかげでまだ下積みのころの明宗の生活が成り立っていたとすれば、共に挙げられる馬糞の収集同様石灰運びも、身近で卑近な仕事だったと推測される。

この他、環境問題に詳しい本学の松藤名誉教授から、シルクロードなどのオアシス都市でも、かつては感染症の流入を抑えるため石灰を用いた予防が行われていたのではないかと推測を示されたことがある。その消毒効果に注目されてのことだ。小島のようなオアシス都市にあちらこちらから人が来れば、感染症の流入の可能性も高くなるわけで、当然その対策もあったろうと考えられたわけだ。楼蘭近辺の古墓に石灰を使っている報告があるから\*1 その可能性はある。治療医療がまだ十分ではなかった頃は、とにかく予防が第一だったはずだ。それは現代でも同様であろう\*2。動物でも犬や猫を埋葬する折には消毒のために石灰をかけるのがよいと聞く。しかし、予防として意図的に撒かれた事がわかる記事は今のところ見つけていないので、そこまでの意識があったかどうか、今後の課題としておきたい。

---

\*1 黄小江「若羌県文物調査簡況」（『楼蘭文化研究論集』新疆人民出版社 1995-9）参照

\*2 例えば日本でも二年後の東京オリンピックを控え、風疹の流入を予想して二月四日風疹の日にその予防の呼びかけを海外からの来訪者の集う成田空港で行っている。

さて、以上見てきたことによると、石灰のイメージにはどうも墳墓や棺などの葬礼という死者を予想させるものがつきまとうように思われる。白という色が葬礼の色と重なるからかもしれないが、実際に棺の塗装にも使われているのだから、「石灰」と聞いて棺や埋葬に連想が行くのも不思議ではないだろう。石灰を唱った詩があまりないのも、棺や墳墓などの葬礼を想像させてあまり明るいイメージが伴わなかったからではあるまいか。だとすれば『元明記事鈔』が「石灰吟」を誣告によって棄死されるに至る于謙の「詩讖」と呼ぶのもよくわかる。それは于謙の王朝に対する精神の潔白さと、それにもかかわらず死罪を与えられて葬られる棺に塗られる石灰の白さを同時に主張した詩とみての事なのだろう。同様に「詩讖」の語が使われた『西樵野記』の李都憲の場合は辺境で戦死することになっていて、これもまたその死と結びついている。とすると、「石灰吟」は、棺に入るまでその汚れなき精神を持ち続けるのだという決意まで連想させるものだった、ということになる。

## まとめ

以上「石灰吟」について二つの方向から検討してみた。分かったことは以下の通り。内容は明快だが、テキストの方はいささか複雑な問題があること、石灰が埋葬のイメージに結びつきやすいものだということである。

この「石灰吟」が『語文』に掲載され小学生の暗唱として用いられることは、艱難に耐え、不屈不撓の態度で世に穢れなきその精神を残すべき事を説くものとして確かに悪いことではないだろう。ただし、それを于謙の人生と関連付けて愛国を導くとすると、その関係は些か頼りないので、注意が必要である。作品よりも作品制作者の方を重視してしまうと、しばしば作者の人生とか生活態度などから作品を読むようになり、いつの間にか作者の人生に重点が置かれてしまうからだ。これでは本来作品が持っている読みの可能性を限定してしまい

かねない。「石灰吟」などは、それ自体で充分主張は伝わるものなので、国際化の進む今日、関係が疑わしい作者の人生と切り離し、何事にも屈せぬ穢れなき精神の尊重のみを古典遺産として肯定し、市民として国際的にも力を発揮するよう指導するのが良いと思われる。本学の授業でもし「石灰吟」を講じるときには、そのあたりを強調することになるはずである\*1。

---

\*1 筆者は石灰石の切り出しから消石灰までの製造の過程に実際に関わったことがなく知識として持っているだけなので、石灰の専門家には奇妙に思われる理解もあるかもしれない。研究ノートに留まる所以である。御指正ください。